

秘匿

警視庁公安部スパイハンターの真実

竹内 明 Mei Takeuchi

捜査

講談社
文庫



講談社文庫

常州大学図書館

藏 秘 書 査 章

警視庁公安部スパイハンターの真実

竹内 明

講談社

|著者| 竹内 明 1969年生まれ。神奈川県茅ヶ崎市出身。1991年慶應義塾大学法学部法律学科卒業。TBS入社。報道局社会部記者として検察庁、裁判所、警察庁、警視庁などを担当。2002年よりニューヨーク特派員。ハーレムのストリートギャング、イスラム社会を長期取材。米同時多発テロ直後の情報機関・連邦捜査機関を取材した。2006年に帰国後は夕方ニュースの編集長、社会部・外信部のデスク、キャスターなどを務めた。現在は政治部外交担当。他の著作に『時効捜査——警察庁長官狙撃事件の深層』（講談社）がある。

ひ とく そう さ けい し ちやうこうあん ぶ しんじつ
秘匿捜査 警視庁公安部スパイハンターの真実

たけうち めい
竹内 明

© Mei Takeuchi 2011

2011年8月12日第1刷発行

2012年1月11日第2刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——大日本印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277003-3

目次

文庫版の読者の皆様へ ————— 6

プロローグ ————— 11

第一章 ゾルゲの亡霊 ————— 51

第二章 運命の狭間で…………… 93

第三章 冷酷なるスパイの犠牲者 ————— 147

第四章	この国の真実	235
-----	--------	-----

第五章	三百四十四日の結末	281
-----	-----------	-----

エピローグ	343
-------	-----

あとがき	359
------	-----

著者の最近の取材メモから	370
--------------	-----

参考文献	391
------	-----

解説	394
----	-----



講談社文庫

秘匿捜査

警視庁公安部スパイハンターの真実

竹内 明

講談社

皆さんの成功は世間に広く知られることはありません。その一方で失敗はすぐに喧^{けん}伝^{でん}されてしまう。だが、あなた方は自分の任務がどれだけ重要で、欠かせないものであるかということに気づいているはずです。あなた方の努力が、どれほど意義深いものであるかは、長い歴史の中で判断されるということも……。

——ジョン・F・ケネディ大統領、一九六一年十一月二十八日、
バージニア州ラングレーCIA本部での、職員に向けてのスピーチより。

目次

文庫版の読者の皆様へ ————— 6

プロローグ ————— 11

第一章 ゾルゲの亡霊 ————— 51

第二章 運命の狭間で…… ————— 93

第三章 冷酷なるスパイの犠牲者 ————— 147

第四章 この国の真実 ————— 235

第五章 三百四十四日目の結末 ————— 281

エピローグ ————— 343

あとがき ————— 359

著者の最近の取材メモから ————— 370

参考文献 ————— 391

解説 ————— 394

文庫版の読者の皆様へ

本書はこれまで一切明らかにされてこなかった「スパイ事件の裏面」だ。舞台は東京。主人公は、暗闇で地を這い、泥をなめるような任務を遂行する「スパイハンター」、そして敵役として登場する「スパイ」である。生身の彼らの姿を、世に明らかにしたいという衝動こそが、私を執筆に駆り立てたものだ。

これから描くのは、緻密な取材に基づいた真実である。私がこの眼で見たものと、百人近くの証言を再構築したノンフィクションだ。文庫版を出版するにあたっては、追加取材によって新たな資料を発見し、ファクトを詰める作業を行ったうえで、加筆することとなった。

インテリジェンス活動は国家として、秘し隠さねばならないもののひとつである。このため、「ニュースソースの保護」の観点から、一部を仮名で展開し、表現に細工を施さねばならなかったことを、ひとまずお許しいただきたい。

本書は、諜報戦が国内で起きていることに眼をつぶり、何ら対応策をとろうとしない、日本という国家への警告でもある。実はその警鐘を鳴らしているのは、筆者の私ではない。組織の末端として諜報戦の現場で闘いながら、切歯扼腕^{せつしやくわん}している男たちだ。

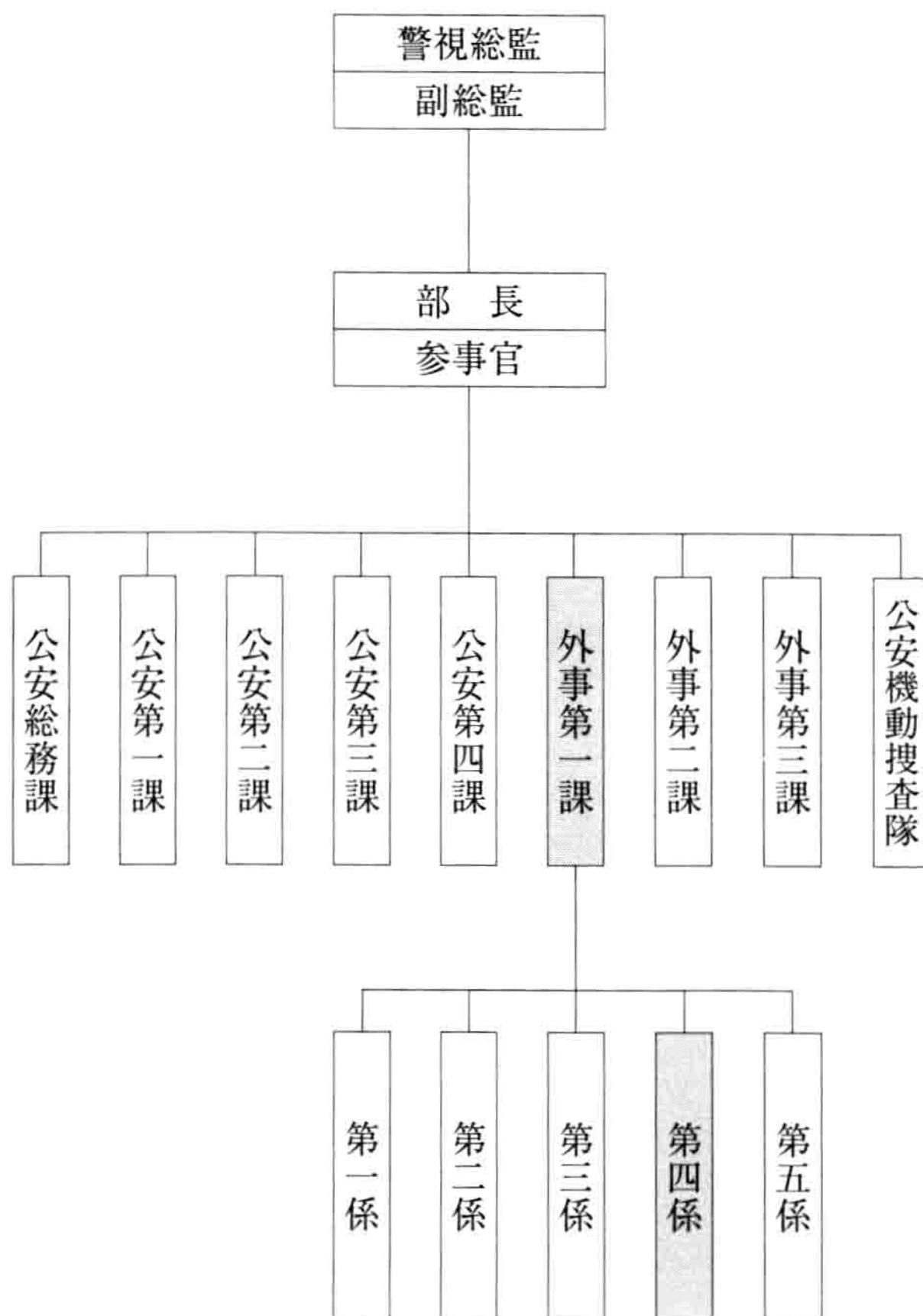
二〇一一年八月

竹内 明

警察組織の階級と所属

階級／所属	警察庁	警視庁	県警本部	署
—	長 官	—	—	—
警視総監	—	警視総監	—	—
警視監	次 長 局 長 審議官	副総監	本部長	—
警視長	課 長	部 長	本部長 部 長	—
警視正	理事官	参事官 課 長	部 長	署 長
警 視	課長補佐	課 長 管理官	課 長	副署長
警 部	係 長	係 長	課長補佐	課 長
警部補	主任	主 任	係 長	係 長
巡查部長	係	係	主 任	主 任
巡 査	—	係	係	係

警視庁公安部組織図



プロローグ

異変

列車がホームに進入する轟音ごうおんから数秒遅れて、ひんやりとした人工的な風に背中を押された。この風を待っていたかのように、男は上質な純白のワイシャツに空気を孕はらませて、地上に向かう階段を上り始めた。ゆつくりと、慎重に、一步一步ステップを踏みしめる男は全身を緊張させ、背後の足音を聞き分けている。

列車が発する唸り声うなが、地底から、かすかに聞こえてくると、周囲は台風の目に入ったかのように無風状態となった。次の瞬間、外から湿気をたっぷり含んだ生温い風が、階段を伝わって流れ込んできた。

逆風に顔を叩かれ、眼を細めたそのとき、階段中腹の踊り場を左に折れた男のフットワークが突如として軽くなった。膝と足首の柔軟なバネを十分に使って、歩幅を一気に広げると、まるで断崖で獲物を追う雪豹のように、階段を駆け上り始めた。

階段を不規則に下りてくる人々の流れをコントロールしているかのごとく、隙間を縫いながら、階段のてっぺんまで一気に上った男の姿は、初夏の日差しを浴びて一瞬、黒いシルエットになった。眩い光まぶしに眼を細めた瞬間、男は視界から完全に消え去った。

「お客さん、出口で待機している。脱尾だつびしろ」